

# 三足鳥原像試探

飯塚勝重

## 一 東北アジアにおける三足鳥の諸相

俗に言う三本足の鳥とは、最近の日本では日本サッカー協会のシンボルマーク（口絵1）で有名になった。尤もこのマークは一九三一年六月採用されたものといわれ、日本伝統の八咫鳥に因むものといわれる。八咫鳥は『日本書紀』（頭八咫鳥）や『古事記』（八咫鳥）でおなじみであるが、文献的にいえば鳥の大きさを表し、足の数を表したのではない。それがいつの間にか中国で伝統の太陽のシンボルとして知られる三足鳥と重なり、八咫鳥⇨三本足となったものだが、それがいつからどのような理由であるかは、今現在も不明である。平安時代、熊野詣で有名になった熊野神社のシンボル（口絵2）でもある。また、日本の朝廷では、明治・大正時代まで、天皇旗に描かれ、時代により、天皇の袞衣・大袖の両肩に日像・月像が描かれる中で、日像の中には三本足の鳥が描かれていたのである。（口絵3・4）例は限られるが、仏像を描いた愛染明王図像の左肩上に日輪の中に書かれた三足鳥の姿も見られる。（口絵5）

朝鮮半島では紀元後から七世紀滅亡するまで鴨綠江をまたぎ、現中国東北三省にわたり活躍した高句麗の四〜六世紀、集安（輯安）に集中した古墳壁画内部天井部に日月が描かれ、日中には三本足の鳥が描かれており、月中には中国古墓よりかなり変形した蟾蜍が描かれていた。これらの日月像は古代日本にも流伝し、他の壁画様式とともに古墳壁画にも大きな影響を与えたと思われる。（口絵6・7）  
それでは発祥の元である古代中国では、この三足鳥はどのように考えられてきたのだろうか。

## 二 古代中国の三足鳥とは

三足鳥とは、中国古代、特に前漢後半以降、壁画古墳において、太陽（日輪）の中にいろいろな姿勢をした三本足の鳥が描かれ、これを神鳥、金鳥、赤鳥などとよばれたもので、まとめて日像という。（口絵8）一方、月の中には当初、蟾蜍（ヒキガエル）が描かれ、同時に兔（菟）あるいは地域・時代によりそのモチーフは異なるが、例えば、月桂樹を中にして変形した

蟾蜍と杵をもち木臼で不死の仙薬をつく兎が描かれるなどがある。ここではこれら両者を日像、月像とよぶことにする。発掘された墳墓内の壁画や、残された絵画（仏絵を含む）に通常は日像・月像がセットで描かれる場合が多いからである。（口絵9）

いわゆる日像・月像はおそらくはその発祥から現代まで、多くの研究者により語り尽くされているかの感がある。その中でも最近の研究に限り、特筆すべきいくつかの先学の成果を紹介してみたい。（日象ともいうが日像に統一する）

まず最初に、中国、朝鮮半島、日本の発掘・発見された一九九四年までの日像・月像を総点検された西川昭彦氏の研究がある<sup>(1)</sup>。

発端は正倉院に収蔵されている桑木阮咸に平成二年一二月、赤外線を使って調査したところ、表面二カ所の満月形から日像・月像が確認されたことに拠るものである。論文「日像・月像の変遷」において、これまでの日中における大方の研究をまとめ、巻末に「表一…中国の日月像の変遷」一〇六例、「表二…朝鮮半島の日月像の変遷」二五例、「表三…日本の日月像の変遷」二五例、合計一五六もの例を挙げ、さらにこれらを「図一」および「図二」において、紀元前二世紀から一三世紀まで一〇〇年を単位に非常に明瞭な図像を示され、われわれに大きな示唆を与えられたものであった。これらの精緻な分析をもとに、収集した文献および資料に基づき、「これら中国南方起源の神話は中国全土につながり、様々な思想と融合し、意味づけがなされ、様々な対象に表された。しかし、基本的には日月像は天界あるいは神仙界の一部を表現したもので、多くの場合墳墓の壁画など葬送に関わるものに表され、埋葬された人物の死後の世界での安穩を願う意

味合いが含まれた。また日月像は陰陽五行説に基づき、日は陽を、月は陰を示し、日は昇り没みを、月は満ち欠けをそれぞれ繰り返すもので、いずれも再生、不死なるものを意味する考え方がある。」として、まず中国の日月像の分析に入り、最初に有名となった前漢初期長沙馬王堆一号墓、三号墓を取りあげ、鳥の足が二本であること、前漢の中期までは二本足ではなかったかとされる。南方起源の日月像が中国全土に広がるのは「前漢後期から後漢」であり、「表現にも幅が出てくる」とし、中国古代からある伏羲・女媧神話に日月像が取り入れられ「唐代にまで続く」「長きにわたって好まれた主題となった（常義・羲和の場合も有り）」が、さらに天文学の発展に伴い、「日月像はその星宿図中の太陽と月の表現にも取り入れられ」、「後漢時代の四川地方において日月像を腹部にもった人面鳥身の羽人の画像磚が数多く」、「また河南省南陽地方では日輪を腹部に持つ陽鳥というものが画像石に表される」と時代の推移とともに変化する姿を紹介し、さらに西王母・東王公信仰と結びつき、四川省や山東省の画像石には、西王母の眷属として三本足の鳥、蟾蜍、不死薬を搗く兎、九尾の狐などが登場し、羽人などと重複して表現されている場合もある。そして全体の日像の見方として、「前漢後期から後漢の時期の日月像のモチーフを見ると、まず日像は前漢後期の河南省洛陽卜千秋墓壁画に見られるようにカラスが飛翔する表現が現れ、（中略）前漢晩期ないし後漢初期にはいよいよ三本足の鳥が見え出す。」といわれる。

こうした三足鳥を取りあげた先学の論考は枚挙にいとまが無い程であるが、さらに日本での優れた業績二、三を紹介しておきたい<sup>(2)</sup>。

荻原法子氏『熊野の太陽信仰と三本足の鳥』は、日本全国の特に射日神

話に絡む三足鳥の祭事について詳述されている。<sup>(3)</sup>

漢代から六朝にかけて大流行する画像石および画像傳墓の画像資料を貴重な社会風俗資料として取りあげた渡辺武氏『画像が語る中国の古代』は、「第一章 中国古代の神話世界の崩壊」のなかで、十日神話を取りあげられたが<sup>(4)</sup>、もう一つの業績は羅二虎著『中国漢代の画像と画像墓』の原著を翻訳して出版の労を執られたことで、私たちは特に四川地方における画像石墓全般と特別に巴蜀における日像・月像の時代的変遷を的確に捉える事が出来るのである。<sup>(5)</sup>

松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究』(上巻)<sup>(6)</sup>においては、池沢優氏は、林巳奈夫氏の研究から、家姆渡文化(紀元前五千年紀・長江下流)の中における象牙製の蝶形器に刻まれた鳥形のモチーフ(口絵10)について「一對の鳥に支へられた太陽神の図像」とみられており、これに続く良渚文化(前二千年紀)で発掘された玉器の中に太陽神と月神が主神となっていたと論じられ、このモチーフが殷の青銅器に刻まれた饕餮紋に引き継がれ、さらに殷代の甲骨文における最高神・帝となり、周代の天の概念に発展すると説かれた。(中国の太陽(神)祭祀の諸類型―象徴としての太陽―)

鳥が運ぶ太陽神による天上の神格が天帝思想に収斂する中で、殷から周以降、いわゆる朝廷儀礼に太陽を主神とする祭祀に特に目立つようなものは見られなくなった。但し、日の入り、日の出をめぐる民間に密着した説話や祖先祭祀に取り入れられるほか、中には、『周礼』大司楽などに拠れば、魯国の年間祭祀の中で、正月の祈穀、五月の大雩、九月の明堂と日を祀るための冬至の月の冬至祭天(魯国の南方郊外において、泰壇という圓丘を築き行った)が行われた。(池田末利氏「文献所見の祀天儀礼序説(下)

参照)<sup>(7)</sup>とか、『後漢書』祭祀志上の「光武帝建武二(二六)年正月、初制郊兆於雒陽城南七里、依鄙采(前漢)元始中(一一五)故事、為圓壇・」とあるが、まず五帝の位を定めた後、東に日神の位、西に月神の位、北に北斗の位を定めたとあり、特に日、月を優先的に定め祀ったという訳では無くなっているようだ。

以上のように早く、殷・周以降、カラスにせよヒキガエルにせよ、日月に象徴性をあたえ、カリスマ化させる意義はその立場を変え、人民の頭上に輝く日月をあがめる天文現象としての日像・月像神話が構成されてきたのではないか。四川省金沙遺跡発現の「太陽神鳥金箔飾り」には四羽の鳥が象られているという。(口絵11)

### 三 三足鳥の原像を求めて

#### (1) 三足鳥初出の文献をめぐる

もともと中国古代において、鳥が三本足として日中に棲むとした説話は、実際はいつの時代から始まったのであろうか。

多くの研究者は、画像化された時代とそう遠くなく、すでに常識的に引用される文献の時代と重ねて三足鳥の存在を仮想する。すなわち、伝説上の位置づけとして前漢・劉安の編纂した『淮南子』と後漢・王充『論衡』の組み合わせによる「通説」から問題は始まっている。

前漢・高祖の七男の家系を持つ淮南王劉安(前一七九―前一二二)が編纂した『淮南子』の「卷七・精神訓」に

①「天有風雨寒暑、人亦有取與喜怒、故膽為雲、肺為氣、肝為風、腎為雨、

脾為雷、以與天地相參也、而心為之主、是故耳目者、日月也、血氣者、風雨也、日中有踳鳥、而月中有蟾蜍、日月失其行、薄蝕無光、風雨非其時、毀折生災、五星失其行、州國受殃」(以下「本文①A」とする)とある。

この「日中有踳鳥」は三本足の鳥と言っていないのに、許慎の注を始め、殆どの人がこれが三本足の鳥のことだという。何故だろうか。

劉安が『淮南子(現存二二卷)』の編纂を完成させた年代については、池田地久氏著『詁注「淮南子」』において、「本書の編纂の開始は、景帝が崩御した前一四一年、完成は武帝即位の翌年(前一三九年)である」<sup>(8)</sup>とされている。その後、この『淮南子』に注釈をした許慎(五八?～一四七?)または高誘(生没?)はともに後漢の人である。編者劉安とは約二〇〇～三〇〇年程隔てて注釈が残されたことになる。しかも、二人の注釈は微妙な解釈の相違からか、部分的に本文を直したことにより、このことが三本足の鳥像とどう関わるのか問われる問題を抱えた筈であるが、殆どそれを議論する事無く今日に至っている。本文最初にも触れたように、『淮南子』完成時期とは関係なくその頃から画像上は、二本足からやがて三本足になったと認識されてきたのである。

先に引いた「日中有踳鳥」にまず許慎はどのように注をしたのか。四部叢刊(上海商務印書館縮印影鈔北宋本)「淮南子二十一卷」の第七卷は「淮南鴻烈解卷第七 大尉祭酒臣許慎上 精神訓」と題し、本文を「日中有踳鳥」とまず踳を躡とし、その注に「踳猶躡也 謂三足鳥 踳読魏之踳」とある。この注には二つの大きな疑問がある。一つは、本文にない踳字について説明しているのである。これは現存の明・正統道藏本(中華民国一四二年二月上海涵芬樓影印)『淮南鴻烈解』「卷一二精神訓」も、またこの系統

を引く諸版本も本文を「躡」と校訂する。しかし、現行の四部備要本『淮南子』(上海中華書局據武進莊氏本校刊 中華書局輯刊)〔本文①A〕は「漢涿郡高誘注」として「日中有踳鳥」に「踳猶躡也 謂三足鳥 踳読魏之踳」と、魏と踳魏の二字こそ違え、許慎と全く同じ注を与えている。

『淮南子』には前漢末の劉向(前七七一六)の手が入っているといわれるが、意を持って許慎が本文を直したとしても、いきなり躡字に改め、それに付けた注は踳字についての注であり、後世の誰か、あるいは高誘自身が本文に手を入れない限り成り立たないものであろう。

このように、版本により「躡鳥」と「踳鳥」があるが、このことについて前引の池田地久氏は本文を「太陽の中に八咫鳥(やたがらす)(三本足の鳥)がうずくまり、…」と訳され、原文は「踳鳥」とされ、その注釈に、「踳」は、底本・道藏本は「躡」に作るが、諸本によつて改めた。」とされている。因みに著者は「編訳の方針」の中で「底本には、現存するテキストの中で最古かつ最善と思われる北宋小字本(四部叢刊本)を使用した。その経文を正統道藏本その他と対校し、また諸注釈を参照して修正を施した」とされる。

二つ目の問題は、後漢の王充(二七―九七?)が『論衡』の中で次のように言っていることに関わる。

②「儒者曰、日中有三足鳥、月中有免・蟾蜍」

多くの人はこれだけを捉えて、これが「三足鳥」と記された文献上の初出とし、これに『淮南子』本文の「踳鳥」を結びつけ、許慎や高誘の注より優先して、古代中国の説話では、「日(太陽)の中に三本足の鳥がいる」とする証拠と説いている。しかし、肝心の王充は続く議論の中で、三本足



の鳥がいるなんてとんでもないと真つ向から反対してこの説を切つて捨てる。

③「夫日者、天之火也、與地之火、無以異也、地火之中、無生物、天火之中、何故有鳥、火中無生物、生物入火中、焦爛死焉、鳥安得立」

同様に月に住むという、兎やヒキガエルも月は水であり、長らく水ばかりの中では生きてはられないはず、その上、日食や月食ではその間どこにいるのか、太陽を見ようとすれば目が眩まない者はなく、太陽が本当にどのような気であるか分からない。その中に有るものの形を鳥とみても、本当に鳥であるかは見ることが出来ないのに、どうして足が三本あるとまで見られるのだろうか、儒者追求の議論は止まるところがない。すなわち、王充は三本足の鳥はいないと言っているのである。

それでは、元に戻つて、蹲と踞とはどのような意味や違いがあるのか。

## (2) 蹲鳥か踞鳥か

いったい古代中国において、日中に鳥がいると言う説話はいつごろから始まったのだろうか。また、鳥の足が二本か三本かは、前漢後期以前に果たして議論があったのかどうか、資料は限られ、すでに多くの人が同一資料に基づいて議論されてきていることを承知の上でもう一度考えていきたい。そのためにまず、『淮南子』の二つの言葉、蹲と踞の違いについて考えてみたい。

〔蹲字の解〕蹲の字について、いくつかの字典に当たる。

『諸橋大漢和辞典』では「ソシ・ソシ・シユン・サン ㊦ 一 うづくまる 二 いもの名 三 あつめる (第四く五省略) 六 古、踞・俊に

作る」と有り、第一義はうづくまる、第二義はいもの名、いわゆる蹲鴟(そんし)のことをいい、司馬相如の岳父卓王孫が「吾聞、汶山之下、沃野下有蹲鴟、至死不饑」といったとされる青銅製の礼器に見られるフクロウがうづくまっている形の里芋(上田万年篇『大字典』はサツマイモとする)の類を指すといわれている。鴟蹲はうづくまるフクロウを意味する。(口絵12)

『佩文韻府』は「座也、『説文』踞也」といい、『説文』蹲は「踞也」とし、踞は「蹲也」という。梁・顧野王撰『大広益会玉篇』(玉篇)も「説文云踞也」と『説文』と同様であるが、踞については、「大戴礼曰獨処而踞、踞蹲也」とある。踞はうづくまることをさしている。

このほかの多くの辞書類も同様「うづくまる」が第一義である。このことは、『淮南子』本文に返せば、「日中にうづくまった鳥がいる」と読めることになる。

〔踞字の解〕踞の字の意味であるが、『諸橋大漢和辞典』では「シユン・ソシ・ソシ・ソシ ㊦ 一 しりぞく(退) 二 とどまる おはる ふす(踞に同じ) 三 物のさま ㊦ 一 ふみにじる けたふす 二 さといも(踞鴟) 三 うづくまる(蹲の古字)」とあり、「踞鳥」について「ソシウ 太陽中にうづくまっているという三本足の鳥(以下『本文①A』の記事を引く)」とある。第一義を取ると退く鳥となり、形を取りがたい。第二義もまた形になりにくい。第三義は踞鳥とまったく同義となり、うづくまった鳥では足が見えず、三足鳥を想像出来ない。それにもかかわらず踞鳥についてソシ(踞=蹲)ウと読ませ、さらに三本足の鳥という。

後に主として取りあげるが、『山海経』卷一四「大荒東経」に「有一大

人跋其上」に東晋・郭璞（二七六一—三三四）は「跋或作俊、皆古蹲字」と「うづくまる」をとる。

唐・歐陽詢『芸文類聚卷一天部上 日』に「五經通義曰日中有三足鳥（中略）（山海經）又曰日中有跋鳥」に「跋趾也、三足鳥也」とある。

また、『太平御覽』卷九二〇・羽族部・鳥の条に「淮南子言曰、日中有跋鳥、月有蟾蜍」とし、その注に「跋獨蹲、止不行、謂三足也」と他の注よりやや具体的に停止する様子が伺えるが、三足であることの意味が不明である。もう少し他の字典・辞書に当たってみよう。残念ながら『説文』に跋の字の解は出てこない。

清・『佩文韻府』は「退也」とあり、『康熙字典』は（「広韻」「集韻」「正韻」を引き）「與跋同止也、（中略）『類篇』以足逆踴曰跋（後略）」とあり、「止」が第一義とすると単に鳥がとどまっていることになる。『玉篇』も「退也」とあり、殆ど『大漢和辞典』と同義で、これらをまとめるとやや「退」の意味合いが強そうである。

最後に白川静氏『字通』の跋および跋鳥についての字釈を見てみたい。まず跋について「シユン うづくまる しりぞく」**形声** 声符は爰しゅん 爰はもと神像の蹲る形で、ムし（耜らい）を頭とする神。その蹲踞（そんきよ）のかたちから、たちどまる、しりぞくの意となった。〔玉篇〕に「退くなり」と見える。□うづくまる、とどまる。□しりぞく、ふす。□ふむ、ふみにじる。□三本足 古訓〔字鏡集〕ヲトル」とあり、続いて「跋鳥」について「しゅんう 跋は三本足。日中にある三足の鳥。〔淮南子、精神訓〕日中に（以下「本文①A」と）とされているが、跋がどうして三本足なのか、これについて全く説明がない。

以上、蹲、跋についてその意味するところを探ってきたが、白川説を除いて、大勢は「うづくまる」と読めるようであるが、これでは、前漢末以降の画像石に表された活動的な三足鳥像とは大きな矛盾を抱える。もう暫く、「跋」字の持つ「しりぞく」、「とどまる」の義にも関心を持ちつつさらに原像を追求してみたい。

### ③ 太陽と鳥の説話を探る

戦国末期から漢代初期にかけて成書となったと言われる『山海経』は、太陽に関する説話をいくつか伝えている。十日説話が最も知られているであろう。まず、「卷一五・大荒南経」に

④「東南海之外、甘水之間、有羲和之国、有女子名曰羲和、方日浴于甘淵、羲和者、帝俊之妻、生十日」

とあり、ここに『山海経』の十日説話が持ち出される。次に「卷九・海外東経」に

⑤「黒菌国……下有湯谷、湯谷上有扶桑、十日所浴、在黒菌北、居水中、有大木、九日居下枝、一日居上枝」

と、よく人々が引用する記事で、十個の太陽の居場所が示されている。「卷一四・大荒東経」では

⑥「大荒之中、有山名曰孽摇顛瓶、上有扶木、柱三百里、其葉如芥、有谷曰温泉谷、湯谷上有扶木、一日方至、一日方出、皆載于鳥」

とあり、ここで、十個の太陽が交替して一日ごとに一羽の鳥を載せて大空に昇る事を示し、郭璞は「中有三足鳥」と注をしている。太陽の中にという意味であろう。続けて本文は、

⑦「大荒之中、有山名曰倚天蘇門、日月所生」

と日月の出場所を示すが、この日の出入りの場所はほかに数カ所記している。

次に西王母と三足鳥についてであるが、「卷二二・海内北経」に

⑧「西王母梯几而戴勝・杖、其南有三青鳥、為西王母取食、在崑崙墟北」

とあり、おどろおどろした西王母が机上に簪と杖を載せ三青鳥を使役していると言うが、郭璞注は「又有三足鳥主給使」（版本により鳥とする）とする。後の画像石では西王母に仕える三本足の鳥が見えるが（口絵<sup>13</sup>）、このほかに、東王公の眷属として三本足の鳥が刀様の武器を背負って仕える像も描かれている。

ついで十日を射落としたとされる羿について、「卷六・海外南経」では⑨「羿與鑿齒戰于壽華之野、羿射殺之、在崑崙東、羿持弓矢、鑿齒持盾、一曰戈」（この話は「卷一五・大荒南経」にも再出する。）

更に「卷一八・海内経」にも羿は帝俊から賜った丹塗りの弓で地上に下り、天下の民を助けた、とある。羿に関して『山海経』の記事は、この後に続くはずの苦しむ民のため、十日のうち九日を射落したり、羿の妻が月に昇ったとするような記事はどこにも見られない。

『淮南子』に先行する秦始皇帝八（前二三九）年完成したと言われる秦の相国呂不韋が学者を集め編纂させた『呂氏春秋』では、三足鳥について言及する記事はなく、僅かに「卷二・慎行論第二」で

⑩「昔者堯朝許由於沛澤之中、日十日出而焦火不息、不亦勞乎」

とあり、高誘注に「梁仲子云莊子逍遙遊焦火作燭火」と有り、十日説話について、莊子がこの話題を扱っていた可能性もある。また、羿については、

「卷一七・審分覽」に

⑪「夷羿作弓」

とあるだけである。要するに『山海経』本文にも『呂氏春秋』にも羿が十日を射て九日を射落としたという説話は出てこなかったのである。

次に戦国時代末楚国の三閭大夫で前二七〇年代ころに汨羅に身を投じて死んだという屈原の『楚辞』を見てみると、「離騷」に

⑫「羿淫遊以佚畋兮、又好射夫封狐」

とあり、地上に降りた羿がその後狩獵にうつつを抜き、好んで大きな狐（一説に大きな家（いのこ）という）を射たという。しかも「天問」では、羿は夏の民の災いを除き、大きな狩りをして天帝に捧げたのに、その妻も寒泥（かんさく）に奪われ、身は殺されたと『山海経』を超える一連の記事がある。

次は多くの方が良く引用する記事であるが、「天問」第一段に

⑬「日月安属 列星安喇 出自湯谷 次于蒙汜（略）夜光何德 死則又育 厥利維何 而顧菟在腹」

と日の出と宿るところを言い、次に月が満ち欠けするのは何の得があつてか、それなのに腹中に兔を抱えているのかという。ここでは（ヒキガエルより）兔を月像としている。第三段に

⑭「羿焉彈日 烏焉解羽」

と、「羿はどこで日を射落とし、烏はどこに羽を落としたのか」といって、ここでは十日説話と日像としての烏説話を踏んでおり、比較的早期の日に烏有りとの文献と思える。

十日と日中鳥は文献上『淮南子』以前の説話にあることは分かったが、

三足鳥を扱った文献はどうか、もう少し当たってみよう。

まず、『史記』卷一一七・司馬相如伝・大人の賦に

⑮「吾乃今目睹西王母、確然白首、載勝而穴処兮、亦幸有三足鳥為之使」とあり正義注に「張云、三足鳥、青鳥也、主為西王母取食、在崑墟之北」とある。ここで初めて三足鳥が出てくる。ただし、すでに『山海経』でみってきたが、西方の崑崙山の岩窟に棲み、髪振り乱し恐ろしい形相をし、鶴の如き白首に首飾りをした西王母に仕え、食料を用意する哀れな鳥となっていて、日中に棲む三足鳥といつてはいない。郭璞らの注がこれが日中に棲む三足鳥だといっているに過ぎない。

同じ『史記』卷一二八・亀策列伝（本文は序文以外、漢末の褚少孫補伝とする）に

⑯「孔子、聞之曰、神亀知吉凶、而骨直空枯、日為徳、而君於天下、辱於三足之鳥、月為刑而相佐、見食於蝦蟇」とあり、孔子の博識を援用して、太陽は徳を以て天下に臨んでいるが、三足の鳥に辱められている（いろいろな例を挙げ、結局）、天下にはいろいろな階級が有り、物は不完全でも生成されると言っている。但し、滝沢亀太郎『史記会注考證』では、「惟（褚少孫の）語は多く勃謾で訓じられず、……辱于三足之鳥、月食于蝦蟇、孔子寧有斯語……」と孔子が何でこのようなことを言おうかと発言自体を否定している。

結局、『淮南子』以外には、日中の三足鳥が行動している姿を想起させるような資料に乏しく、再び『淮南子』の残る文献をもう一度登壇させようと思うが（『淮南子』卷三・本経訓）、それ以前に、少し視点を変え、考古学上の研究成果に関わる三足の鳥（鳥？）像を探ってみよう。

#### 四 考古学上の三足鳥

##### （一）埋納礼器に見る三足鳥

ここで、私が衝撃的な経験をしたことを紹介したい。それは、二〇〇一年八月、中国を旅して、陝西省漢中から宝鶏市に抜けた時のことである。スケジュールの一部をさいて当時の宝鶏市青銅器博物館を急ぎ参観したときである。周代のすばらしい青銅器の数々に圧倒されたが、時間が無く、退館間際、兎に角カメラを向けシャッターを切った一枚である（下図参照）が、帰国後、パソコン上で映像を見ると、素人写真で何とも見苦しい写真であるが、三本足をした鳥に見える四体の鳥が写っており、その一体はすでに一九七六年『中華人民共和國古代青銅器展』で日本で展観されていたもの（口絵14）であった。但し、そのころは、多忙を極め、再調査をする暇が無かった。暫くして、すでに、この遺跡の全容について、『文物』一九七六年第四期に「陝西省宝鶏市茄家莊西周墓發掘簡報」<sup>⑩</sup>の記事が載っていることが分かった。

この遺跡墓は、当時の陝西省益門公社茄家莊にあり、秦嶺山脈の川陝公路入り口の西側・清姜河と北方の渭河に囲まれた肥沃な大地の一カ所であり、文化大革命下の一九七四年一二月下旬発掘が始まり、一九七五年四月末までに二座の墓葬（M1、M2）と馬坑、車馬坑各一カ所を発掘整理した。長期の土砂流失で墓口は元々の高さにはなかったが、墓内の保存は完全で人が荒らした様子はなく出土文物も豊富で、西周時代相を表していた。年代はほぼ西周康（王）・昭（王）・穆（王）時期（前一〇〇二—





B 画像（口絵14、15参照）

九四〇年<sup>(11)</sup>であると報告している。ただ三本足の鳥については、M1乙椀室出土器物として鳥尊二件とこれより少し小さい三足鳥が二体を写真付で紹介されていたが、形以外の特別な説明はなかった。（口絵14・15）

この遺跡墓出土の状況は日本においても、一九九八年に『新中国の考古学』（平凡社）において前記『文物』とほぼ同様記事が紹介され、三本足の鳥も「鳥形尊 高三・七cm」と写真付であったが説明はつかなかった。<sup>(12)</sup>

更に二〇〇八年三月、角道亮介氏は「宝鶏磔人墓における葬礼の差異とその変化」<sup>(13)</sup>を発表、内部墓装の構造や副葬品を含む埋納物等を詳細に伝えられたが、特に鳥尊または三足鳥について言及することは無かった。

紙幅の都合でさらなる詳細を省くが、三本足の鳥尊（写真B）または三足鳥（写真C）（鳥とはあくまでも報告書によるもので、見方によれば鳩のようでもあるが、鳥そのものとも言える）は、この遺跡墓群のM1乙椀室に埋納されていた青銅器で、故人に捧げられた礼器であろう。

ただし、B、Cとも尾の部分が「鍊状文」を持つと言うが、「鎖のような紋」では表面上だけで、一種異様な変形箱形器を連結しているように見える。これについては、四川省金沙遺跡出土の「青銅製の鳥」（D）と形が似通っており、Dは尾の下部を地面に付けているため二本足で立っているように見えるが、太い足である。これに対しB、Cは神秘的な様相を見せる大きな尾が地面についていないので、バランスを取るため三本足としたのだろうか。但し、『山海経』にしても、又、各地で催される古代中国美術展などでも時に目にする怪異な動物像に過不足ある手足をした主に礼器の類を見ることが出来る。（写真E・F口絵16・17）

この三足鳥像を仲介にして古代中国の三足鳥像が出現するのはいつからかと追及した安立華氏によれば、おおむね次のように言う。<sup>(14)</sup>  
 『天汶口文化及び竜山文化の三足陶鬻の文様に金鳥負日像の発現が見られ、同時に三足鳥の飛翔図も見られるところから、『山海経・海外東経』に「（黒鹵国）下有湯（暘）谷、湯谷上有扶桑、十日所浴」とあり、郭璞注に「谷中水熱也」とある。また「大荒東経」に「湯谷上有扶木、一日方至、一日方出、皆載于鳥」とあり、湯谷は大海中にあることから東方を意味し、東方の中からこの伝説が生まれ、後各地に広まったのである。鳥トテムを持つ鳥文化部落に関わる大汶口文化の陶尊刻文と仰韶文化廟底沟類型紋に同様飛翔する三足鳥とみられる文様がある。』とす。（口絵18）

こうした中国古代文化の発祥地点と東方の象徴としての太陽説話を結合して、鳳トテム文化が東方から中原へと伝播していく中で、太陽の中に鳥（鳳凰、玄鳥、つばめ、鳥など）が棲むという説話が形成され、各種陶器に模様化されていった、とする考えは中国研究者の多くの支持をえてい

るが、特に鳥とみられる像は両羽を広げ、二本または三本足で空中に飛翔していたものが、日輪の中に二本または三本足で立ち上がっている図像で定着してくる。王大勇氏も『龍風文化源流』<sup>(15)</sup>において、火の神炎帝神話の発展とともに、鳳凰を中心とする鳥トーム文化の展開が見られると豊富な図像で示している。但し、鳥は跋鳥とするが跋字の説明はされていない。しかも、跋鳥が蹲っている図はどこにも見られない。

## (二) 再び『淮南子』を読む

ここでもう一度本論で触れてこなかった『淮南子』の関係説話をその注釈と併せて検討してみたい。

「卷二・俶真訓」に

⑬「(前略) 是故雖有羿之知而無所用之」

とあり、高誘注は「是說上古之時也、但甘臥治化自行、故日雖有羿之知其無所用之、是堯時 羿善射能一日落九鳥・・(中略)・・非有窮后羿也」とあり、羿には古代堯以前の羿と堯時代の有窮の後羿とは別人である、といつている。ここでは九日を落とし九鳥を落としたという説があることを確認したい。『太平御覽』卷九二〇・羽族部七・鳥の条に

⑭「淮南子曰堯時十日並出、堯命羿仰射十日、中其九、鳥皆死、墮其羽翼」とある。「卷四・墜形訓」に

⑮「扶木在陽州、日之所俯(てらす)(注略)、建木在都広(注略)(中略)若木在建木西、末有十日、其華照下地」

とあり、若木の末端に十日あり、蓮華の花のようで光っているという。

「卷六・覽明訓」に

⑯「譬若羿請不死之藥於西王母、姮娥竊以奔月」とあり、これは月像に関わる有名な事である。

「卷八・本経訓」に

⑰「逮至堯時、十日並出、焦禾稼殺草木、而民無所食、(中略)堯乃使羿誅鑿齒於疇華之野、殺九嬰於凶水之上、繳大風於青邱之澤(注略)、上射十日而下殺揆繇・・(後略)」

とあり、有名な一節であるが、十日の出現とそれにより民の稼ぎも途絶え、怪物が跋扈するようになり、堯が羿に命じて南方の野にて十日を射て、地上の怪物を退治し、それにより堯は天子となるとあり、本文にはないが、高誘はここで「羿射去九日」と注をする。

以上①から⑰までの資料からは十日に鳥が棲み②、③では否定)、⑥により一日一個の鳥が鳥を載せて交替で大空に昇っていた。しかし、⑩と⑭により羿により日が射落とされ、その中に棲んでいた証拠の鳥の羽も落ちてきたこと、⑰により仰ぎ見て十日を射ったこと、以上が引用した資料の本文から言えることで、十日のうち九日を射落としたこと、日に載った鳥は三足鳥であるということは、各書の注釈から言えることで、それらも文献的には注2の安志敏氏がいう後漢時代からであろう。しかも三本足と思われる鳥・三青鳥は三足鳥と関係なく『山海経』の他の記事にも西王母に頤指される役割として登場する。

## 五 結びに代えて

それでは三足鳥説話はいつ頃どこから生まれてきたのか。これ迄の一般

的な考えは、日・月の黒点説、ついで陰陽五行説の発達過程からか、太陽は一の陽の気であり、二は陰気、そして太陽に棲む鳥は次の陽の気、すなわち三であり、そこから三本足が出現するという説にある。『春秋元命苞』に「日有三足鳥者陽精、其僂呼也」（僂は生長の言という。背を曲げて慎むという意味も有り）であるという。結論をここに置けば無難であろうが、日中の鳥像が前漢中期以降、南の方から描かれるようになったという事は足場として、その説話起源を文献上から見ると、せいぜい戦国末（二本または三本足を問わず）くらいにしか遡れなかった。決して結論を急ぐわけではないが、『山海経』諸説が時代をどのくらい遡れるか、ここでは触れる余裕がなかったが、『山海経』の西王母説話と、西周・穆王の伝記といわれる西晋・太康二（二八二）年、汲冢の墓地から発見された竹書五卷（後六卷に編集）の『穆天子伝』（郭璞注）では、穆王は西王母の地に遠征し、三年間止まったと言う。真偽はともかく、これらを手がかりに、両書の関係を更に追求することと、宝鶏市茹家莊西周墓から発掘された礼器としての三本足鳥尊および三足鳥の二つの鳥の意味するものが他所にも出土し、後世に引き継がれて三本足の鳥に結びつくことはなかったか、その場合、三足鳥の原像は華北或いは関中平原発はなかったのか。それとも単に足下の安定を求める為の像であったのか。学術研究の重みということを充分に意識しつつ、今後の研究課題としていきたい。

#### 注

- (1) 西川昭彦「日像・月像の変遷」（正倉院年報第一六号 平成六年三月、同一四号平成四年三月）  
 (2) 一九七三年第一期「考古」において安志敏は「長沙新発現的西漢帛画試探」

の中で馬王堆一号墓の帛画の構成を詳述しつつ、帛画上部の金鳥（二本足）と甘肅省武威の後漢墓出土銘旌上の日中三足鳥などを引き、「三足鳥に至るの後は漢以来の伝説に基づく」とされた。

- (3) 荻原法子「熊野の太陽信仰と三本足の鳥」（戎光祥出版一九九九年九月）  
 (4) 渡辺武「画像が語る中国の古代」（平凡社一九九九年一月刊）  
 (5) 羅二虎著・渡辺武訳『中国漢代の画像と画像墓』（慶文社二〇〇二年一月刊）  
 (6) 松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究（上巻）』（有限会社リトン二〇〇二年六月二日）所収  
 (7) 池田末利「文献所見の祀天儀礼序説（下）」『中国古代宗教学研究』一九八一年参照  
 (8) 池田地久著「訳注『淮南子』（講談社学術文庫、氏は旧版を再検討し改訂版を二〇一二年七月刊行）  
 (9) 中国古典文学大系一五「楚辞」昭和四四、平凡社目賀田誠訳による。  
 (10) 「陝西省宝鶏市茹家莊西周墓発掘簡報 宝鶏茹家莊西周墓発掘隊」（『文物』一九七六年第四期三四一五六頁）ほかに陳如「茹家莊西周墓看孔丘「復礼」的反動本質」（『文物』一九七六年第四期五七―五九頁）がある。  
 (11) 平勢隆夫「中国の歴史〇二 都市国家から中華へ付年表」（二〇〇五年四月株式会社講談社刊）参照  
 (12) 中国社会科学院考古研究所編著 閔野雄監訳『新中国の考古学』（一九九八年 平凡社）  
 (13) 角道亮介「宝鶏磬人墓における葬礼の差異とその変化」（『東京大学考古学研究室研究紀要』第二二号二〇〇八年三月 四一―七五頁）  
 (14) 安立華「漢画像・金鳥負日」『画像探源』（『東南文化』一九九二、三一―四号）  
 (15) 王大勇『龍風文化源流』（北京工芸美術出版社 一九九八年一月）

本稿作成に当たり貴重な史料を提供いただいた本研究所所長高橋継男教授、佐藤三千夫客員研究員および熊本県菊池氏に関わる資料を提供くださった竹内老子氏に深く感謝の意を捧げるものである。

（客員研究員）

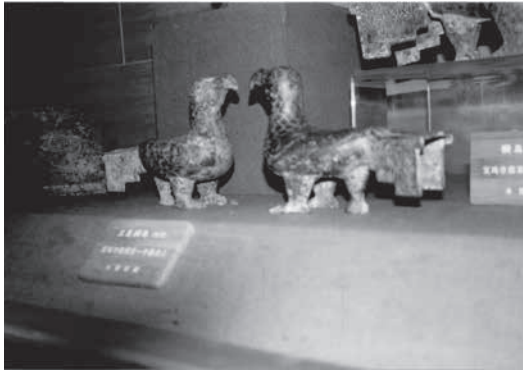


写真 B (現存宝鶏博物館)  
2001年 8月筆者写す



写真 B および C (現存宝鶏博物館)  
2001年 8月筆者写す



写真 E 春秋時代の天鳥尊  
新疆电子出版社「中国神话与古玩珍赏」  
2002 (CD-ROM 収像) より

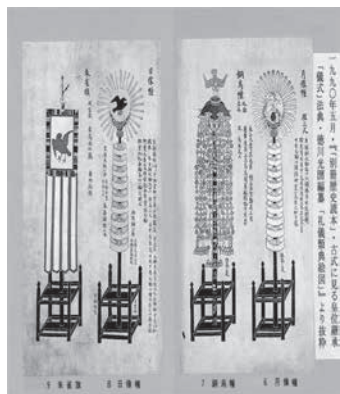


河北省唐山市費各莊18号墓  
前6世紀春秋時代  
中国国家博物館名品展「悠久の美」  
(2007年 1月) より



写真 D 「よみがえる四川文明～三星堆と金沙遺跡の秘宝」展 (2004) (共同通信社) より





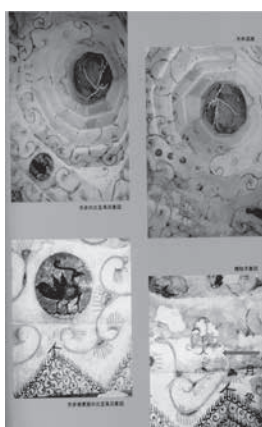
口絵3 『儀式』法典・徳川光圀編纂『礼儀類典絵図』



口絵2 熊野大社の神鳥幡・八咫鳥



口絵1



口絵6 『好太王碑と集安の壁画古墳 読売テレビ放送編』(木耳社 昭和六十三年九月) 118頁角抵塚天上図より



口絵5 日輪の中の三足鳥



口絵4 『儀式』法典・徳川光圀編纂『礼儀類典絵図』



口絵9 『考古』(科学出版社 1973年第1期)所収



口絵8 三足鳥画像



口絵7 『高句麗文化展図録』(高句麗文化展実行委員会 1985年) 78頁 輯安五塊墳第四号墓(6世紀)



口絵12 鷓鴣尊・商後期 『泉屋博古 中国古銅器編』2002年



口絵11 太陽神鳥金箔飾り 『よみがえる四川文明』展示目録2004年より



口絵10 双鳥朝陽象牙彫刻 『世界四大文明中国文明』展 「中国新石器時代」 (2000年 NHK)



口絵15 三足鳥 陝西省宝鸡市茹家莊出土 西周時代 『文物』1976年4期 39頁



口絵14 三足鳥尊 陝西省宝鸡市茹家莊出土・西周時代 『中華人民共和国古代青銅器展』1976年』



口絵13 西王母 新繁県出土 四川漢代画像磚 高文編 『上海人民美術出版社』1987年



口絵18 大汶口文化・仰韶文化等の鳥と日輪 安立華 『漢画像“金鳥負日”図像探源』(『東南文化』3-4、1992 70頁)



口絵17 江蘇丹徒磨盤盤墩周墓 掘青銅匜 『文物』1985年11期



口絵16 山西省博物館2010年